Accounts of
Materials & Surface
Research

ウェブ版「材料表面」の創刊に想う

東京都立大学名誉教授・清宮 懋

ウェブ版「材料表面」の創刊を心よりお慶び申し上げます。 表面・物性物理化学の領域をカバーする学術誌の休刊や印刷出版の規模縮小変更が国内国外で続く中で、この領域にインターネット日本語版の形で新たな学術誌の誕生することは、かつてコロイド懇話会・表面研究会発刊の「表面」誌の編集に携わったものの一人として、待ちに待った喜ばしい出来事と、発刊にご努力下さった方々に敬意と深謝を捧げる次第です。 思えば、第二次世界大戦の終結後間も無くして、世界の多くの家庭に電気洗濯機が導入されるに及んで、必然的に合成洗剤の大量生産・大量消費の時代を迎えました。 自然の成り行きとしてコロイド・界面化学が物性物理化学の一領域としてその重要性が脚光を浴び、さまざまな界面活性剤の合成とそれらの物性研究に関わる研究が、海外、国内の学会発表に溢れた時代がありました。 その賑やかさは、物理化学の主流は構造化学とする立場の人達からは、多少のやっかみも混じえて「コロイド・界面化学」を「キッチンサイエンス」と揶揄したこともあった程です。 当時の我が国は、まだ新制大学の増設が行われていた時代で、コロイド界面に関わる物性物理化学の講義は、多くの物理化学のテキストでは、軽く触れられる程度で終わっていたのが一般的な実情でした。 雑誌「表面」はそうした時代背景を担って(1963 年創刊・発行広信社)誕生しました。 創刊時「表面」誌の編集を担当された諸氏《 五十音順:略敬称で、浅原照三(東大)、伊勢村寿三(阪大)、小田良平(大阪府大)、北原文雄(東理大)、後藤廉平(京大)、小森三郎(阪大)、佐々木恒孝(都立大)、佐多直康(阪大)、水渡英二(京大)、立花太郎(お茶大)、玉井康勝(東北大)、高橋浩(東大)、中川俊夫(塩野義研)、中垣正幸(京大)、早野茂夫(東大)、松浦良平(九大)、目黒謙次郎(東理大)、矢部章彦(お茶大)》は、界面活性剤や粒子分散技術の物性物理化学の基礎の解説に留まらず、海外の先進的な科学技術論文の紹介や、ダイジェスト欄なる大学院生や助手の原稿料稼ぎを兼ねた文献抄訳のページを設け、雑誌の編集委員とは別に多数の専門テーマ毎の編集担当者を決めて、読者が最新の科学の話題に触れる工夫など、斬新な企画がふんだんに盛り込まれて人気を博しました。 科学雑誌としては当時岩波書店発行の「科学」同様、破格の高額でしたが、一時は、街の書店の店先で肩を並べたこともありました。 しかしそれも暫くの間のピークで、20-30 年も経過すると、国内、国外における表面科学関連の専門図書や科学雑誌、翻訳書、テキストの出版が相次ぎ、競争が激化するに及んで、広告収入の確保が次第に難しくなったことも経営の悪化の一因と見られるでしょうか……「表面」誌に限らず学術図書の印刷出版に厳しい時代が到来して数十年が経った今、出版の世界は確実に、印刷からインターネットの世界に移行を始めたように見受けられます。 海外でもコロイド・界面科学関連の web 出版が相次ぎ、小生の電

子メールボックスにも沢山のウェブ版科学書籍やウェブ版新聞まで、購読勧誘が舞い込むようになりました。 界面活性剤の役割も大量消費される洗剤としての機能から様々な新しい機能を期待する fine chemical としての物性の研究が一層求められるようになりました。 また様々な高機能繊維の複合材料や nano-fabricated surface も次々と開発されて重要性を増して来ています。 我が国の研究・技術者の養成も戦後型の高等教育への反省を込めて20世紀型から21世紀型への変化が求められている時期でもあります。 物性物理化学の一領域としての「コロイド・界面化学」も疾うの昔に kitchen science の枠を超え、構造化学までも取り込んだ「表面科学」として、ますます周辺の基礎・応用領域の期待に応えて発展して行く事と思われます。 ウェブ版といえども出版ビジネスの厳しさは変わらないと思いますが、ここに「材料表面」の創刊が、前途洋々たる船出となることを期待したいと思います。